

藤岡勝二・新村出の門下生 (2)

明治・大正の言語学 その6

佐藤喜之

市河三喜

市河三喜は明治19年(1886)2月18日、東京下谷に生まれた。父の三兼は万庵と号する書家で、祖父は幕末の三筆と言われた三亥(号は米庵)。さらに遡れば、三亥の父は儒者で漢詩人の市河寛斎である¹。書は家の芸であったため、市河三喜は五、六歳の頃から毎日習字を習わされ、後に清庵の号を与えられている。同じように幼時より、兄三陽について漢文の素読を学び、後に高等小学校1年の時から、三陽の指導の下、英語を習い始め、中学に入学する頃にはナショナルリーダーの巻三まで読み進んでいた。市河の弟三禄によると、

「兄貴は子供の時分から英語が無暗に好きでした。私共の生家は下谷の練堀小路ですが近くに槐陰学館と云ふ英語の塾があり、兄貴は根が几帳面の性質ですから時間になれば、いくら大雷雨に会はうと又病気で少し位熱があらうと御構ひなしに通つてゐました。「英語も大切だが身体も大切にしな」と親爺の云ふたのをよく覚えてゐます。其熱心を持つて今度は私に英語を教へて呉れたのです。これには実に閉口しました」〈市河三禄(1936)『三禄飄談』岡倉書房、pp. 14-15〉。

槐陰学館という英語塾に通い始めたのは明治30年(1897)1月で、翌年4月、東京府立尋常中学校(後の東京府立第一中学校、いわゆる一中。都立日比谷高校の前身)に入学する。中学時代は英語の学習に力を入れる一方で、小学校時代から関心のあった博物に対する興味も衰えず、同好の士とともに植物採集、昆虫採集に出かけている。ついには同級の東条操²らと一緒に、「日本博物学同志会」(当初は日本博物学会)を設立し、機関雑誌「博物之友」を発行した。事務所を市河の自宅に置き、設立当時、機関誌は市河が毛筆で浄書して回覧に供し、後に会員が増えたために活版印刷となった。市河は庶務、会計、編集を一手に引き受けたため、学業が次第に疎かになり、英語は常に一番で国語漢文の成績も良かったが、数学、物理化学、歴史地理といった暗記物が苦手であった。4年、5年はいったん「落」と書いたものを消して赤で「及」と書き直す、いわゆる「赤及」で進級し卒業した。

英語の勉強については、

「英語に集中し始めた動機は、中学三年の頃から原書を読み始めたことで、毎日曜上野の図書館へ行つて、先輩三宅恒方氏から教わった *Insects at Home*, *Insects Abroad*, *Butterflies of North America* というような本を借り出して、一ページに四五十も知らない単語があるのを不完全な字引きを頼りに覚束なくもコツコツ

1 市河三陽(1992)『市河寛斎先生』寛斎・米庵顕彰会。揖斐高(1990)『市河寛斎 大窪詩仏』岩波書店、江戸詩人選集第5巻。蔡毅・西岡淳(2007)『市河寛斎』研文出版、日本漢詩人選集9。

2 東条操(1884-1966)は東京帝国大学文科大学国文学科卒。「日本方言学の母」といわれ、近代的な方言学を確立した。

読んだのであった」〈市河三喜（1949）『小山林堂随筆』研究社，pp. 275-276〉。

と市河自身も述べているように、昆虫、植物、鉱物関係の原書を読むことが目的であった。このほか英語学習のために、当時出ていた「英語世界」「英学新報」のような英語雑誌を購読し、新進の英語学者であった勝俣銓吉郎や正則英語学校で教鞭をとっていた英学界の巨人、斎藤秀三郎の著書を愛読していた。斎藤秀三郎にはかなり傾倒しており、正則英語学校の英語雑誌「Yorozu Weekly」に掲載された斎藤の講義を読むだけではなくノートに写し取り、また、高等学校の入学試験終了後の夏休みには、正則英語学校の夏期講習に出て斎藤秀三郎の講義を直に受けた。

明治36年（1903）3月、府立一中を卒業し、同年9月、第一高等学校文科に入学した。中学卒業から、7月の一高の入学試験まで、不得手であった数学、物理、化学などを勉強するために神田小川町の夜学に通い、後に英語学者として名をなす東京帝大生石川林四郎から英語も教わっている。中学時代より博物に関心があったので、文科ではなく理科に進みそうなものだが、市河自身は、近視のために顕微鏡を見ることに堪えられないだろう、というのが理科に入らなかった理由だとしている。

一高の英語の授業では、毎時間必ず蹟く先生がおり、それを注意するのが市河の役目であった。市河自身、英語は正則英語学校で斎藤流に鍛えられ、自身も鍛えてきたとの自信があった。一高では英語、ドイツ語ともに週9時間の授業があったが、市河にとって英語は極めて楽であり、ドイツ語も英語の土台ができていたため進みが早かった。ドイツ語もその資質に問題のある、前世紀の遺物のような教師ばかりだったようだ。

課外で、*Hamlet*や*Merchant of Venice*などシェイクスピアを読み始めたほか、内村鑑三の英文書、多くの文学書、語学方面では斎藤秀三郎の*Higher Lessons, Advanced Lessons*を読んだため、英語力はどんどん増し、1年の学年末の英語の試験では、教師より“perfect”と褒められ、全体の成績でも72人中2番と優秀な成績を修めた。ちなみに3番は後の政治家、鶴見祐輔（哲学者、俊輔の父）であった。また、安倍能成、阿部次郎らと友に読書会を作って、二週間に1冊ずつドイツのレクラム文庫を読むこととし、レッシング、ゲーテやイプセン、カーリダーサの独訳本を講読した。英語会話は、ネイティブスピーカーと接するのは学校の教室だけであったから、課外では参考書の例文を暗記することに専心し、柔道や剣道のように、英語暗唱の寒稽古まで行っている。

博物に対する関心も衰えず、2年生から3年生に進級する間の夏休みには、アメリカのスタンフォード大学を卒業して間もないアンダーソン Anderson, M. P. とともに朝鮮の済州島に採集旅行に出かけた。これは大英博物館のために企画されたもので、Duke of Bedford's Zoological Expeditionという探検隊の一員としてアンダーソンは東アジアに派遣された。市河は新聞上に学生の通訳を求めるとの広告に応じたものである。後に市河は「済州島紀行」という一文をものしている³。

一高を卒業して、明治39年（1906）9月、東京帝国大学文科大学言語学科に入学、同級には田中秀央、前田太郎、高畑彦次郎がいる。当初は英文学科を志したが、英語を専攻するには様々な言語を学習して、語学の基礎を築き上げることが必要との観点で言語学科志望に変更した。言語学科の主任教授は藤岡勝二であったが、市河の実質的な指導はちょうどその年にイギリスより招聘されていたロレンス John Lawrence が行った。

ロレンス（1850-1916）はイギリス南西部の Sampford Peverell で生まれ、幼い頃から貧困と戦い、

3 市河三喜（1939）『昆虫・言葉・国民性』研究社、に収録。

苦学してロンドン大学の BA, MA を取得。1901 年にロンドン大学の英語学講師となり、市河の入学と同時に東京帝国大学文科大学教師として来日した。ロレンスは通常の講義の他に、各学生の能力に応じて個人的教授をするため、「英文学演習室 (English Seminar)」を設け、市河は試験に合格して入室を許され、主に古英語と中英語について厳しく指導を受けた。言語学科の学生としては、イタリア語、ロシア語、スペイン語、オランダ語、サンスクリット、朝鮮語、アイヌ語を少しずつ勉強した。市河は、後にこれらの言語はたいいてい忘れてしまったが、言語に対する概観を得るには大いに役立った、と回想している。ラテン、ギリシャの古典語も言語学科の学生にとっては必須で、ギリシャ語は哲学者のケーベル Raphael von Koeber から習っている。フランス語も大学入学後に始めたが、英語を通して学んだので進みは早かった。

市河は明治 42 年 (1909) 7 月卒業、卒業に際しては恩賜の銀時計を拝受し、そのまま大学院に入り 3 年間、ロレンスの下で勉学を続けた。大学院時代は一時、言語学科同級の田中秀央、英文学科の土居光知⁴と同居し、お互いに切磋琢磨して勉学に励んだ。その時分の勉強ぶりについて市河自身の回想を引用すると、

「明治四十二年七月大学卒業後は大学院で三カ年間ロレンス先生に色々なものを教わった。ゴート語、アイスランド語等の研究は全く未知の大海に船出するような気持だった。文法を少しやったかと思うとどんどんテキストを読ませられる。詩をやらされる。ギリシア、ラテンも先生と一緒にホーマーやリヴィーを読んだ。ヴァージルだけはあまり下読みで時間がかゝるので御免を蒙って、これは田中秀央君一人がやることになった。アイスランドの *Gunnlaugssaga* や古代フランス語の *Chanson de Roland* やホーマーの *Odyssey* などと一緒に読んだ時の先生はほんとに面白くて溜らないというような情熱を老顔に漂わされた。(略) とにかくこういう調子で三年間ロレンス先生の個人教授を受けたのであるから語学の力はぐんぐん進み、教師も生徒も孜々として励んで他を顧みる暇がなかった」(『小山林堂随筆』研究社, p. 297)。

同居していた土居光知の思い出を引用すると、

「市河君の勉強ぶりをちょっと紹介してみると、44 年の夏、ひと月ばかり大学の研究室へ通って、Stevenson の *Treasure Island* を初めから終りまで、問題になると思われる語句を、一々 *N. E. D.* でしらべながら読んだといっていた。これは 1921 年研究社から発刊された *Treasure Island*, ed. by Sanki Ichikawa の発端となったものであろう。(略) 市河君はまたこの時代に、Icelandic, Norse, Danish などの語を学んだようである。それは、まず、辞書と、文法書と、それらの言語に翻訳された新約聖書を求め、文法書を参照しながら、辞書で各語の用法などをしらべ、マタイ伝を原文、英訳本、既修の Icelandic, Norse, Danish 訳などと比較しながら誦するまで読むという方法であった。かかる方法により、数か月の中に一つの言葉を修得したようであるが、それらを利用することがなかったのも、晩年には忘れてしまったと語ったことがあった」(土居光知 (1970) 「駒込神明町時代の市河君」英語青年 116-7, pp. 6-7)。

大学院修了後、大正元年 (1912) 10 月 1 日、新橋駅を出発して欧州留学へと向かった。大学院時代の過度の勉学により健康をだいぶ損ねたようで、留学前の身体検査では仔細に検査された上、その後、診察した医師の自宅に呼ばれて、留学には差し支えないが健康には十分に注意するように、との忠告

4 土居光知 (1886-1979) は英文学者。明治 43 年 (1910) 東京帝国大学英文学科卒。後に東北帝国大学教授となる。

を受けている。留学先はイギリスとドイツであったが、第一次世界大戦のためドイツへ行くことはできなかった。

イギリスでは半年ほどオックスフォードで独りコツコツと勉強したが、次第に友人もできて勉学以外にも目を向けるようになり、散歩を規則正しくするようになって徐々に健康を取り戻していった。留学中に恩師ロレンスに宛てた手紙によると、オックスフォードに滞在半年で大学の講義からは何ら得るものがないとしている。留学中に市河が力を入れていたのは図書の蒐集で、英語学者で音声学者のスイート Henry Sweet と語源学者スキート Walter William Skeat の旧蔵書を購入したが、これらは大正 12 年 (1923) の関東大震災で残念ながら灰燼に帰した。

滞英一年の終わりにケンブリッジから恩師ロレンスへ出した手紙では、

「英国へ来て一年経ったが英語のプラクティカルの知識は少しも進まない。自分のように英語を専門とし且成るべく日本人を避けてイギリス人の中にまじって生活しているものがこんな有様なことから、日本人ばかりでコロニーを作っている人達の語学力や推して知るべしである。とにかく日本人の語学教育は大に改善しなければならない問題を沢山持つて居る。帰朝してからその方面にも時間と精力の一部分を割かなければならないことになるであろう。そして改革の手は問題の根底に向つて下されなければならないが、今日まだ日本では名だけしか知られていない phonetics から出発すべきであろう。これからロンドンへ行つて一年ジョーンズのもとで大にやる積りです。(略) ジョーンズから自分の発音を手厳しく矯正されて居るが大変訳に立つて居る。語学はどうしても生きた言葉の研究をやらなければならない」(『小山林堂随筆』p. 300)。

ジョーンズとはイギリスの Daniel Jones (1881-1967) のことで、Henry Sweet (1845-1912) の後を受けてイギリス音声学を確立、基本母音を定めるなど、現在に至るまで影響を残している偉大な音声学者である。市河の書き残したものを読むと、留学で一番成果のあったのは、英語音声学であり、帰朝後の『英語発音辞典』へと結実する。

帰朝後の大正 5 年 (1916) 2 月、東京帝国大学文科大学助教授に任ぜられ、英語学英文学第二講座担任となった。就任間もない 3 月に恩師ロレンスが死去、若年の身で英文学科を主宰することとなり、またロレンスに代わって卒業試験を行わなければならなくなった。この時の卒業生には芥川龍之介や久米正雄がいた。芥川龍之介のことについて市河は次のように述べている。

「芥川が大学を卒業したのは大正五年七月、私が留学から帰って数カ月後のことであるから、子弟といってもその関係はきわめて浅く、ただ卒業論文を読み口述試験で悩ましたという程度である。卒業論文は一週間で書上げたというだけあって非常に短いものであったがよく出来ていたと思う。口述試験にはずいぶん難問を出した。それはオスカー・ワイルドが「試験とは愚者が賢者も答えることのできない問題を出すもの」と言った種類の質問だったかも知れない。芥川は答えられないでしばらく黙っていた。左手に頬をあて頭をかしげて考え込んでいたので「君、歯でも痛いのかね」と言ったが、数年の後人づてに聞いたところによれば「先生うまいことをいったよ、おれが試験官だったらやっぱりそういうね」と友人に述懐したそうである」(市河三喜 (1957)『旅・人・言葉』ダヴィッド社, pp. 234-235)。

大正 9 年 (1920) 8 月、34 歳にして東京帝国大学教授に任ぜられ、5 年後には英語学英文学第一講座担任となり英語学に関する講義、演習を行い、一時はラテン語も担当していた⁵。文学方面は第二

5 ラテン語を担当していた同級の田中秀央が京都帝国大学へ移ったため。

講座担任となった斎藤勇⁶が受け持ち、この後 20 数年、東京帝国大学英文学科の市河・斎藤時代が続く。大正 12 年 (1923) 年には *On the Language of Robert Browning's Poetry* により文学博士の学位を授与される。学位論文は残念ながら関東大震災で烏有に帰した。担当していた主な講義は英語学概論、英文法概説、英語史概説で、英語学演習には Sweet, Jespersen, Onions, Curme 等を用い、原典演習のテキストには Shakespeare, Bible, Dickens, Stevenson, Synge 等を使用した。

昭和 14 年 (1939) には最年少で帝国学士院会員に選ばれ、学外では昭和 12 年 (1937) 財団法人語学教育研究所の理事長となり、終生その職にあった⁷。昭和 21 年 (1946) 10 月、定年により退官、以後、語学教育研究所以外の公職に就くことは一切なかった。昭和 34 年 (1959) には文化功労者となった。

市河の高弟で、東京大学文学部英文学科で市河の跡を襲う中島文雄は、自分が受けた授業について、次のように回想している。

「市河先生の講義題目は、「英語語源論」「古代中世英語演習」「シェイクスピア講読」の三つであった。英語語源論は、ラテン語・ギリシア語・ゴート語の手ほどきを基礎にした実質的なもので、得るところが大きかった。もう一つ Icelandic をやらなければと先生は言われたが、時間がなくて割愛されたのは惜しかった。先生はしゃべるよりも黒板に書くことの方が多く、それをノートにとるのも大へんであったが、私はあとで Skeat の *Concise Etymological Dictionary* を一々引いてノートの整理をしたので、相当に努力した」〈中島文雄 (1970) 「市河先生と英語学」英語青年 116-7, p. 3〉。

市河三喜は中学時代より「博物之友」に植物、昆虫関係の論文を多く書き、大学卒業の翌年には、ハックスレー著、市河三喜訳注 (1910) 『進化論大意』語学文庫刊行会、を刊行している。大学院以降、博物関係は随筆に書く程度で、専門の英語学に専念していった。市河の業績は、①英語学、②英文学注釈、③英語学関係書籍の編纂、に大きく分けられる。

(1909) *A Monograph on the Historical Development of the Functions of "For"*, 卒業論文
日本語の題名は「FOR ノ歴史的発達ニ就キテ」。表紙・前書・参考文献表 6 ページ、本文 256 ページの for に関する精緻な研究で、美しい筆記体の英文で書かれており、市河の七回忌に複製されて参会者に配布された。この論文は for に関して、古英語から現代英語までの用例を蒐集し、意味・機能の歴史的推移を明らかにしたもので、恩師ロレンスから高い評価を受けたものである。

市河の学風は「大体先生の学風は実証主義である。先生に影響を及ぼした学者は直接には Lawrence 先生であることは言うまでもないが、Stoffel, Storm, Sweet, Jespersen などの著述に学ばれるところが大きかったと思う。特に Jespersen には傾倒しておられた (略) 先生の興味は理論よりも用例の蒐集にある。(略) こういう学風は、先生が植物や昆虫の採集に熱心で、その方面でも専門家の知識をもっておられたことと相通じるものである。このことは先生の書物の蒐集にも現われている」〈中島文雄「市河先生と英語学」〉であり、『英文法研究』以後の著作についても、このような学風に基づいて研究され著されたことが見て取れる。

6 斎藤勇 (1887-1982) は英文学者。明治 44 年 (1911) 東京帝国大学英文学科卒。孫に殺害されるという悲劇的な死を遂げた。

7 途中 18 年弱、所長職に就いた。

(1912)『英文法研究』⁸ 英語研究社、(1954)『英文法研究 増訂新版』研究社
雑誌「英語青年」に寄稿した論文を集めて一冊にしたもので、その研究態度は序文によく表れているので引用する。

「要はただ文法をもって単に英語を正しく話したり書いたりする術であるとか、あるいは文法の教える規則は絶対なもので、これに違反する言い方は不正であるとかというような見方を避けて、英語における種々の現象をすべてそのまゝ言語上の事実として受け入れ、これを公平に観察し、どうしてこういう言い方が生じたかを、あるいは歴史的に上代にさかのぼって、あるいは他の国語との比較研究により、あるいは心理学的の立場から、不完全ながらも説明を試みて見たいというのが本書の趣旨である。一言にして言えば英語の言語学的研究である」〈増訂新版 p. v〉。

この研究方法は、それ以前の斎藤秀三郎を代表とする規範文法とは一線を画しており、日本の英語学の科学研究は『英文法研究』から始まったと言われている⁹。第一編として、規範的には間違いとされる such an one や It's me の用法など初版では 20 項目、増訂新版では 30 項目について用例を挙げて詳しく解説している。第二編としては「ディケンズと俗語の研究」を収めている。市河はこれ以後も、個々の言語現象について用例を集め、語の用法を明らかにするという実証的研究を続けるが、英文法や英語史の分野で、理論的、体系的な研究は行わなかった。

(1923)『英語発音辞典』¹⁰ 研究社

イギリス留学中に Daniel Jones に啓発されてからの懸案の辞書であり、市河の門下生である岩崎民平¹¹の大いなる協力があって上梓できた。収録語数は 33000 語余で、IPA (国際音声記号) を用いた最初の発音辞典である。これ以後、日本の英語教育において、IPA が普及し、英和辞典にも採用されていく。巻頭の発音概説ではアメリカ英語の発音についても述べているが、本文はイギリス英語の発音だけである。

(1930)『ラテン、ギリシャ語初歩 (英学生のため)』研究社

「ラテン語の知識は英語を知り、英語の知識を正確にする上に必要欠くべからざるものであるばかりでなく、ギリシャ語の知識とともに、西洋文化の淵源に溯つて Homer, Aristotle, Cicero, Seneca 等に直接教へを受けるよすがともなるものであるから、たとへ少しでもこの二つの国語を覗いて置くことは、あらゆる方面の人に望ましい事であると思ふ」〈はしがき〉という考えに基づいて著されたもので、ラテン語とギリシャ語をあわせた本文が 127 ページの初歩的な本である。先に引用した高弟中島文雄の言通り、英語語源学の授業にラテン・ギリシャは必須であり、そのための最小限の知識を得させるためのものである。市河三喜は、昭和に入ってから、ラテン語担当者の呉茂一¹²が病気で休んだときにもラテン語の代講を行っている。

8 (2001)『20 世紀日本英語学セレクション』第 1 巻、ゆまに書房、として復刊。

9 大塚高信 (1949)『英語学論考』研究社、の中の「本邦英語学研究小史」。(2001)『20 世紀日本英語学セレクション』別冊、論攷 20 世紀日本英語学研究の紹介と解説、ゆまに書房、に再録。

10 (2001)『20 世紀日本英語学セレクション』第 10 巻、ゆまに書房、として復刊。

11 岩崎民平 (1892-1971) は東京外国語学校卒業後、中学教諭を経て、大正 11 年 (1922) 東京帝国大学英文学科卒業、戦後には東京外国語大学学長を務めた。

12 呉茂一 (1897-1977) は昭和 4 年 (1929) から三年余、東京帝国大学言語学科のラテン語講師。

(1936)『英語学 研究と文献』¹³ 三省堂, (1956)『英語学 研究と文献 改訂版』三省堂

英語学の名著解題で、辞書類にはじまり、方言、音声、英語史、文法、一般言語学などに関する内外の著作について解説、評価している。市河自身の『英文法研究』は「文法」の部門ではなく、「特殊研究」の部門に入れている。

(1935)『古代中世英語初歩』研究社, (1955) 第2版, (1986)『古英語・中英語初歩』研究社

古英語、中英語を学ぶのは、“労多くして効少ない”が、英語の科学的研究をするためには欠かせない、という市河の年来の信念に基づいて著されたもので、1986年版は市河の門下生松浪有が全面的に改訂をし、書名も古代英語・中世英語という用語が使われなくなったので古英語・中英語に改めた。

(1937)『聖書の英語』研究社

「余は十数年来読書の際気付いた用例を蒐集して Stoffel の研究を補遺し、兼ねて我国の英学生に聖書を親しましめる為にその用語文法上の特質を明かにしたものを公にして、Shakespeare と共に日夕聖書を朗読して英文を解する上にも作る上にも資する所あらしめんことを欲したのである」〈はしがき〉というように、『英文法研究』と同様に実証的研究の成果である。

次の二書は随筆風のものをも含めた論文集。

(1947)『英語雑考』愛育社

(1949)『言葉・言葉・言葉』中央公論社

英語学関係の翻訳には次の二書がある。

イエスペルセン (1927)『言語』岩波書店、神保格と共訳

ヴェーベル (1952)『英語構造論』研究社、英語学ライブラリー 1

(1921-32)『英文学叢書』全 100 巻、研究社

市河三喜が英語学と同様に力を入れていたのが注釈で、岡倉由三郎¹⁴とともに『英文学叢書』100巻を監修し、市河自身も Shakespeare を中心として 15 冊の注釈を行った。このときの注釈に門下生の嶺卓二が加筆校訂したものが、(1963)『詳注シェイクスピア双書』全 20 巻、研究社、である。

この他には以下のような注釈書があり、『宝島』以外は現在でも手にすることができる。

(1921)『*Treasure Island* 宝島』研究社

(1934) *Chaucer's Canterbury Tales: General Prologue*, 研究社

(1949)『クリスマス・カロール』研究社小英文叢書 77, 初版は (1920) 岩波書店

(1949)『ジーキル博士とハイド氏』研究社小英文叢書 78, 初版は (1920) 岩波書店

編纂した辞典類も多いが、代表的なものは、

(1940)『英語学辞典』研究社

(1952-55)『世界言語概説』全 2 巻、研究社、服部四郎・高津春繁と共編

(1952)『英語引用句辞典』研究社

(1964)『英語イディオム辞典』研究社

『英語学辞典』は英語学だけではなく、英語の研究に必要な音声学、一般言語学の事項も取りあげて

13 (2001)『20 世紀日本英語学セレクション』第 10 巻、ゆまに書房、として復刊。

14 拙稿 (2004)「博言学事始め」学苑 762 号、参照。

いるほか、語学者の伝記も加えている。執筆者は当時の第一線の研究者で、言語学（大塚高信・中島文雄）、音声学（服部四郎）、文法（重見博一・岩崎民平・鈴木重威）、英語史・固有名（佐々木達）、韻律学・修辞学（清水護）の8名である。

市河三喜は随筆でも一家をなし、その主題は言語、博物、紀行である。

(1933)『欧米の隅々』研究社、旅行記でほとんどは夫人晴子の筆による。

(1939)『昆虫・言葉・国民性』研究社

(1949)『小山林堂随筆』研究社

(1956)『私の博物誌』中央公論社

(1957)『旅・人・言葉』ダヴィッド社

(1966)『市河三喜英文集 *Collected Writings of Sanki Ichikawa*』開拓社

市河が理事長を務める語学教育研究所が、市河の満80歳を記念して編集、出版したもの。半分近くは *Japan and Japanese* に関する文章である。随筆だけではなく、*Foreign Influences in the Japanese Language* と題する35ページに亘る論文が掲載されているほか、*The Pronunciation of English Loanwords in Japanese, Some Features of the Japanese Language* といった本格的な論文も収められている。

このほか翻訳として、(1949)『ハムレット』岩波文庫、評伝として(1936)『チャーサー』研究社英米文学評伝叢書1、がある。

市河三喜は大学においては、みなに畏れられる存在であった。早い時期から禿頭となり、現在残されている写真を見ても、近寄りがたい雰囲気漂わせている。門弟の思い出を引用すると、

「先生は、後にはいとも穏やかになられたが、私たちが在学していた頃は、実にきびしかったように思う。とくに演習（略）で当てられた場合には、学生はそれこそ戦々兢兢たる有様であった。テキストを読んだり訳したりしている間にも、いつ先生の「いいえ」で鋭くチェックされるか知れなかったからである」〈鈴木重威(1970)「畏れと親しみ」英語青年116-7, p.13〉。

「その頃の印象を一口で言うと、厳格なこわい先生だった。先生の *Sordello* 講読に出席したが、この難物の詩を、先生ご自身が訳されつつ、随時だしぬけに単語の意味を問われるので学生はヒヤヒヤしていた。解らないと辛辣な皮肉を頂戴することがあるので途中から逃げ出す学生もあった」〈小林淳男(1970)「赤インキ」英語青年116-7, p.13〉。

「市河先生は、周知のように、寡黙でほとんど笑顔を見せられないので、こわい先生ということで通っていた」〈服部四郎(1970)「代講」英語青年116-7, p.21〉。

「大学生の私にとって、市河先生はやはり大変怖い存在であったようだ。怖いというのは正確でないが、なにやら「鬱然」といったようなおそろしさがあった。研究室で本を読んでいると、一番奥の御自分の部屋から、ふらりふらりというよりのそりのそりという感じで出てこられて、黙ったまま後ろからじいっとこちらの本をのぞきこんで、黙ったまま行ってしまわれる。これまた少々大げさにいうと、こちらはその間、息を殺している思いであった」〈木下順二(1970)「市河先生のこと」英語青年116-7, p.24〉。

昭和の初年に、当時東京帝国大学仏文学科の副手であった中島健蔵との間でいさかいがあった。と

はいっても教授と副手であるから、力関係からいって中島が市河にいじめられた、というところであろうか。ある日、市河教授が授業前にフランス語の不定法について中島副手に質問をした。中島は答えられなかった。市河は中島のフランス語の実力を試そうとしたのか、中島に仏文を訳すように求めた、つまり試験をした。緊張した中島は誤訳をした。市河は意地悪そうな薄ら笑いを浮かべた。その後すぐに市河の質問の答えがわかったので、中島は授業中の教室に行き市河に答えを告げた。市河にすれば学生の前で恥をかかされた、ということになる。これ以後、市河三喜と中島健蔵の関係がこじれてしまった。後に、中島の講師嘱託の採否を決める教授会における投票で、市河だけが反対票を入れたとのことである。これは中島健蔵の思い出で¹⁵、市河三喜のこれに関する言及はない。

大学内では怖い存在であったが、家庭内では、

「私は父に叱られたことは一度もありません。書斎に籠っている以外は、食事の時も、にこにこ私達のお喋舌りを聞いていますし、当時はまだ珍しかったスキー、テニス、自転車、ピンポン、何でも私達とやって、また何でも一番下手なお父さんでした。どうして「市河先生がこわい」といわれるのか、わからないのも当然でした」〈野上三枝子「歩み去った父」 英語青年 116-7, p. 28〉。

ただし、家庭的には余り恵まれず、大正 15 年に次男を失い、昭和 18 年には妻と長男を続けて失い¹⁶、昭和 30 年には再婚した妻にも先立たれた。晩年には、家族の中でたった一人残った、隣に住む娘の野上三枝子¹⁷が市河を支えた。市河三喜は昭和 45 年（1970）3 月 17 日、死去した。享年 84 歳。

市河の蔵書のうち英語学関係の書籍は東京大学英文学教室に寄贈され、市河文庫として所蔵されている。この他にいくつかの大学や大阪府立図書館にも寄贈したが、日本語、中国語、朝鮮語、モンゴル語など東洋語関係の欧米書は慶応義塾大学言語文化研究所に市河文庫として所蔵され、（1963）*The Catalogue of the Ichikawa Library*, でその内容を知ることができる。

参考文献

- （1986）『東京大学百年史』部局史 1、東京大学出版会
- （1986）『東京大学百年史』資料 3、東京大学出版会
- 『帝国大学一覧』帝国大学、1886 年から毎年出版、1898 年以後は『東京帝国大学一覧』
- （1954）『市河博士還暦祝賀論文集 第六輯』研究社
- （1970）「英語青年」第 116 巻第 7 号、市河三喜先生追悼特集号
- 市河三喜（1949）『小山林堂随筆』研究社

* 引用に際し、旧字体は新字体に改め、段落は適宜追い込み、あるいは改段を施した。

（さとう よしゆき 総合教育センター）

15 中島健蔵（1977）『疾風怒濤の巻 回想の文学①』平凡社。中島健蔵（1903-1977）は仏文学者で文芸評論家。

16 二人を追悼するために、市河自身が、（1945）『手向けの花束』私家版、という追悼文集を編纂している。

17 野上三枝子の夫君は、作家・野上弥生子の三男。弥生子の長男・野上素一（1910-2001）は昭和 9 年（1934）東京帝国大学言語学科卒、後に京都大学イタリア語イタリア文学科教授。